

地域遺産をめぐる映像制作実践の再設計と展開

—「下田まち遺産」プロジェクト2年目の成果と課題—

長谷川隼人

大正大学 教学マネジメント推進機構学修支援センター(DAC) 専任講師

(要旨) 本稿は、下田市の「下田まち遺産」を題材に、大学生が地域と協働して映像作品を制作するPBL型教育プログラムの実践報告である。昨年度の課題を踏まえ、事前学習の充実、実習期間の延長、地域との対話機会の強化など設計を改善した結果、学生は地域の歴史・暮らしを多角的に捉えた独創的な作品を制作した。今後は発信や参加者の多様化を通じ、地域遺産の継承と活用の深化を目指す。

キーワード：地域遺産、プロジェクト型学習、関係人口、デジタル映像制作、大学・地域連携

1. はじめに

静岡県下田市は少子高齢化の進行のなか、観光を基幹産業として交流人口や関係人口の創出に取り組んでいる。下田市は、2015年より地域構想研究所の地域共創コンソーシアムを通じた連携関係にある。本プロジェクトは、その協定関係を基盤としつつ、下田出身の筆者が景観保全に関わる地域関係者へのヒアリングを契機にはじめられた。

下田市は、豊かな自然と多様な文化・歴史資産を有し、住民参加型で未来に残したい地域資源を認定する「下田まち遺産」を景観行政に位置づけ、これまでに154件を登録してきた。全国的にもユニークな制度である一方、保全にとどまらず、住民の自発的な発想による活用の可能性が課題として残されている。

そこで、筆者は、2024年3月と8月に市役所を訪問し、新たな協働のあり方を協議しながらプログラムの準備を進めた。こうして、2024年度に表現学部メディア表現学科2年生を対象としたプロジェクト型学習として実践され、「下田まち遺産」を題材にしたデジタル映像作品を学生が制作し、4チーム16名が作品を完成させた。その成果と課題の詳細については、拙稿「地域遺産のデジタル活用化の教育プログラムについて—授業設計の効果検証と今後の展望—」『地域構想』Vol.7(2025年3月)を参照されたい。

本稿では、2024年度の課題を踏まえて実施された2025年度のプログラムの概要と成果、そして次年度以降の展開に向けたプロジェクトの構想について報告する。

2. プログラムの概要

(1) プログラムの前提条件

本プログラムは、放送・映像分野を専門とする2年次学生を対象としている。学生たちは、初年次教育を終え、3年次以降の専門演習に向けて本格的な専門教育へ移行する段階にあるが、将来的にメディア業界への就職を志向するものが多い。ゆえに、多くの者が撮影や編集までの基礎的なスキルを持っている。

また、実施授業の性格は、プロジェクト型学習(PBL)として、知識や技能の習得にとどまらず、限

られた時間や資材のなかでチームとして作品を完成させる協働的学習が可能となっている。とりわけ、学外実習を組み込める柔軟なカリキュラムであり、現地でのフィールドワークや地域関係者との交流を正規の学修活動として位置づけられる。

さらに、授業期間と学生の学修段階も重要な条件である。学期内で一定期間を集中的に確保でき、短期間であっても企画・制作・ふり返りまでを一連の学修プロセスとして経験できる時間のゆとりが確保されている。また、複数の教員による専門的指導と伴走的支援が可能であること、自治体側が教育目的を理解し、学生の学びを優先した受け入れ体制を整えていることも前提となる。今年度も、これらの条件がそろふことで、プログラムの実践が可能となった。

(2) 昨年度の課題

昨年度のプログラムは、観光を基幹産業とし、交流人口・関係人口の創出に取り組む下田市において、学生が地域住民と関わりながら映像制作を行うだけでなく、若者の視点による地域の再発見と発信を行うことであった。こうした取り組みをキャリア形成期に実施することで、将来的に下田市と関わる人づくりに寄与することを狙った。

昨年度の実践をふり返るなか、いくつかの課題が明確になった。第一に、時間的制約の問題である。2泊3日という限られた日程のなかで、企画立案から撮影、編集までを行う進行は、学生にとって負担が大きく、特に編集作業が深夜に及ぶことで、心身の疲労や作品の完成度への影響が見られた。

第二に、地域との関わり方の深度にばらつきが生じた点である。地域住民との交流を通じて下田への理解や愛着を深めた学生がいる一方で、十分な接点を持てなかった学生もあり、関心が観光的理解にとどまるケースも確認された。関係人口としての意識形成には、より継続的な関わりが必要であることが示唆された。

第三に、学生の作品における独自性と満足度の問題が挙げられる。多くの学生は作品完成に達成感を得たものの、コンセプトの不明確さや表現技法の不足により、創造性や独自性に課題を感じていた。理想と現実のギャップをどう埋めるかは、教育設計上の重要な検討点として残った。

さらに、作品の発信や評価の仕組みにも課題が残った。地域内外への発信や視聴者からのフィードバックを試みたものの、十分に機能したとは言い難く、学生の活動が地域に与えた影響を可視化する手法の再検討が必要となった。

以上のように、昨年度の実践は多くの成果を得る一方で、プログラム設計、地域連携、フィードバック、発信・評価の各面において改善すべき課題が明らかとなった。今年度は、これらの課題を踏まえ、より持続的で双方向的な学びと地域協働の実現に向けたプログラム改善を図った。

(3) 今年度のプログラムの概略

本年度のプログラムも、3QT 期間（9月中旬～11月上旬）の表現学部メディア表現学科の授業科目「PBLⅡ」の一環として実施した。履修学生は、表現学部メディア表現学科放送映像メディアコース2年生20名であり、昨年度よりも増えた。担当教員は同学部の田島悠史がつとめた。加えて、下田市出身である筆者がコーディネーターとして参画し、教育と地域連携の橋渡しを担った。

学生側に提示する課題は、昨年同様に、「下田まち遺産」を含む地域の文化や暮らし、行事を取材・記録し、それらを映像作品として表現することとした。今年度のプロジェクトも、事前準備から成果のふり返りまでを含む4つのフェーズで構成した。フェーズⅠでは、実習先の事前レクチャーとともに作品構想や撮影候補地の検討を行い、学修目標を設定する事前準備を行った。フェーズⅡでは、作品構想についてのプレゼンテーションとフィードバックを行い、実習に向けた準備を進めた。フェーズⅢでは、下田での実習を通じて撮影・仮編集・ふり返りを集中的に実施し、地域住民との交流や講

評会も組み込んだ。フェーズIVでは仮完成作品へのフィードバックを基にブラッシュアップを行い、完成した作品を学生と視聴するとともにふり返しを実施した。

また、今年度も下田市と共催し、景観行政を所管する建設課を中心とする下田市役所の協力を得た。実習地は、下田市郊外にあたる白浜地区を選定した。現地での実習期間は、10月27日(月)から30日(木)までとした。この期間は、白浜地区にある伊古奈比咩命神社(通称:白浜神社)の祭礼にあたる。期間中の火達祭や三番叟といった地域行事の取材も行えるように配慮したのである。

(4) 実習先:伊豆白浜について

フェーズIでは、白浜地区出身の筆者が白浜について約90分かけて事前レクチャーをした。レクチャーの際は、白浜の特徴として注目される白砂の海岸や白浜神社などについて(図-1)、それらを単なる観光資源と見るのではなく、長い時間をかけて自然と人間の関係のなかで形づくられてきたという「まなざし」を持てるように努めた。



図-1 写真中央上部の砂浜の中間が白浜神社



図-2 白浜大浜にある大明神岩

例えば、白い砂浜は、1000万～2000万年前に現在の伊豆半島が海底火山時代(白浜群層)の火山性堆積物や貝殻の破片が黒潮によって運ばれ、形成されている¹。こうした自然条件は、先史時代から人々の移動や交流を促してきた。縄文時代には伊豆諸島のひとつである神津島産出の黒曜石が白浜地区を含む南伊豆の遺跡から出土しているように、島々を往来する航海や交易が行われていたことが確認されている²。これらは、白浜は早くから「海を介した交流の場」であったことを物語っている。このように、この地の自然環境は、伊豆半島だけで完結するものではなく、島嶼部や海流を含む広域的な環境と結びついている。

古代・中世に入ると、白浜は、自然崇拝を基盤とする信仰の場としての性格を強めた。白浜神社に伝わる事代主命と后神である伊古奈比咩命(いこなひめのみこと)をめぐる神話は、外来の神と在地の神が融合するプロセスを示している。白浜神社は、その信仰の中心であり、伊豆諸島や南伊豆一帯と結びついた広域的な祭祀ネットワークの拠点として位置づけられてきた³。地震や噴火といった自然災害が頻発した平安期には⁴、自然の脅威と共存するための精神的支柱として、白浜の神々の威信が

¹ 「伊豆半島ジオパーク」(izugeopark.org)、最終参照日:2026年3月1日。

² 杉山浩平、池谷信之「縄文/弥生文化移行期における神津島産黒曜石のもうひとつの流通—神津島砂糖崎産黒曜石の動き」『考古学と自然科学』60号、2010年。相川壤「後期旧石器時代前半期における神津島産黒曜石の利用とその広がり—原産地推定結果の広域的再集成から」『東京大学考古学研究室研究紀要』第33号(2020年3月)。

³ 深澤太郎「考古学から見た三嶋神・三嶋大明神と『三宅記』」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第17号(2025年)、参照。

⁴ 石渡明「平安時代の「日本三代実録」の地震・津波・噴火記録:地震西進系列の白眉」『日本地質学会ウェブサイト』(<https://geosociety.jp/faq/content1052.html>)最終参照日:2026年3月1日。

高まった。

このように白浜は、火山や海といった自然現象を神格化する世界観が色濃く残る地域として特徴づけられる。現在の白浜神社の例大祭においても、神社近くの「大明神岩」(図-2)の付近の海岸に斎場を設け、かがり火をともしことで伊豆諸島の神々に対して祭りのはじまりを伝え(火達祭)、大祭終了に際して神饌を供して諸島を遙拝し、「大明神岩」から海中に島の数に相当する七本の御幣と供え物を投げ入れる(御幣流し)。

近世に入ると、白浜の人々の生活はより具体的な生業の歴史として展開した。江戸時代には、天草(テングサ)採取をはじめとする海の資源が村の経済を支え、葦山代官や沼津藩支配のなか海面利用権をめぐる交渉を通じて、地域としての自治的性格も培われていった⁵。近代になると、白浜村営の天草漁業が成立し、明治から昭和にかけて村全体で漁業を経営する独自のモデルが展開された。この仕組みでは、収益が社会基盤整備や教育、奨学金などに充てられ、残りが村民に平等配分されるなど、無税の共同体的経営の先進事例として全国的に注目された⁶。一方で、労働と分配のあり方をめぐる批判や葛藤も存在し、理想と現実の両面を併せ持っていた⁷。

戦後以降、白浜は、市町村合併によって下田市の一部となり、天草漁業の衰退とともに生業構造は大きく変化した。高度経済成長期には観光地としての性格が強まり、海水浴場としてのリゾート地として知られるようになったが、その背景には、こうした長い歴史の積み重ねが存在している。現在でも、白浜地区内の各部落(原田、長田、板戸)の若い男性は、毎年交代しながら、祭礼期間中に三番叟(下田市指定無形文化財)を奉納している(図-3)。この三番叟は、部落ごとに口伝で継承されており、いまに残る村落共同体の伝統を象徴している。

(5) 今年度の工夫や仕掛け

このように、事前レクチャーでは、白浜を単なる「現在の観光地」として捉えるのではなく、太古から続く自然のリズム、信仰の記憶、共同体の工夫と葛藤が折り重なったフィールドとして理解することの重要性を強調した。つまり、伊豆白浜を表現するためには、表層的な景観や出来事だけでなく、その背後にある時間的・歴史的文脈に目を向ける必要があることを伝えたのである。



図-3 祭礼期間中に一般公開される三番叟



図-4 カミサンバ/ヒノデザンバ (一般非公開)

⁵ 静岡県賀茂郡白浜村役場編『昭和29年度版 天草の要覧』静岡県賀茂郡白浜村役場(「昔の白浜に学ぶ会」により2003年12月1日復刻)、1954年10月。伊豆の天草漁業編纂会編『伊豆の天草漁業』成山堂書店、1998年)、参照。

⁶ 長谷川雅俊「分場拾遺IV 『白浜村営天草漁業』の実態」『伊豆分場だより』第356号(2019年1月)、参照。

⁷ 齋藤典子「海女集落の形成過程にみるジェンダー秩序の形成—伊豆白浜における海女労働の事例から」『名古屋大学人文科学研究』第33号(2004年)、参照。



図-5 「風まち下田」での交流会の様子



図-6 ベイステージ下田での成果報告会の様子

その意図は、昨年度の学生たちの関心が表面的な観光的理解にとどまるケースや学生の作品完成のコンセプトの不明確さを避けるためである。現在の地域課題の情報にあえて触れないことで学生たちがシティプロモーションや観光振興を目的とする映像づくりにならないように配慮し、現地を訪れた際に映像づくりのインスピレーションを得やすくするための背景知識のインプットに注力したのである。

また、事前レクチャーとともに、学生たちには、どのような作品ジャンルにしたいのか、2週間ほどの期間を設けて、グループごとにラフスケッチを描いてプレゼンテーションをしてもらい、田島及び筆者からフィードバックを行った（約2時間）。フィードバックでは、観光振興や地域課題解決になりがちなグループに対して、自分たちが映像という手段でどのような表現を行いたいのかを問い、原点に立ち返るようなアドバイスに努めた。

現地実習は、昨年度の課題を踏まえて、10月27日（月）から30日（木）までの3泊4日の日程で実施した。なお、今回の実習では、筆者が事前に宮司と氏子会長に相談をして、神社拝殿内で日の出前に奉納される「カミサンバ」ないし「ヒノデザンバ」と呼ばれる一般非公開の三番叟についても、学生の参観と撮影を許可してもらった（図-4）。それらは学生たちの作品の一部に用いられている。

また、昨年度に地域との関わりの深度にばらつきが生じた点を考慮し、実習2日目には、地域の関係者との対話型セッションおよび中間報告・懇親会を「風まち下田」にて実施し、学生の企画や映像試作に対してフィードバックを得る機会を設けた（図-5）。

今回、2日目に設定した理由は、昨年度の反省を踏まえている。昨年度は、実習初日に地域の交流会を設けたのだが、その際に生じたのは、これから撮影に入ろうとする学生たちに対して、地域の方々が良かれと思い先回りして撮影のアイデアを提供してしまうことであった。その多くは、地域の方々が外部の人々におすすめしたいモノや場所となる。結果として学生たちは、地域の方々の思いに付度した作品づくりになりがちとなった。

ゆえに今回は、学生たちが自分たちの構想にそって撮影を開始して1日経過した段階で、欲しい「画」が撮れる場所などのアドバイスをもらう、という構図を意図的につくったのである。

なお、田島と筆者は、進捗管理を兼ねて、初日と3日目に作成途中の作品に対して、1グループあたり30分近くかけてフィードバックを行なった。その際の基本スタンスも、自分たちが映像という手段でどのような表現をしたいのかを問い直すことにおいた。

実習最終日には、「ベイステージ下田」において成果報告会を開催し、下田市長や静岡県賀茂地域局長をはじめとする行政関係者、下田市観光協会、(株)伊豆急行、地域のキーパーソン等を招いた（図-6）。

これら現地実習の運営に関して、昨年度と大きく異なった点は、今回のプログラムのパートナーとして、静岡銀行下田支店が宿泊先および交流会・成果報告会に関する地域調整支援をしてくれたことである。静岡銀行下田支店の支店長や地域共創担当行員は、初日、交流会、成果報告会にも参加し、

学生たちにコメントなどを寄せてくれた。昨年度よりも多くの方々関わってくれたことは、今回の実習の特徴のひとつとなった。

3. 学生の作品(成果物)と発信

(1) 作品紹介

今回は、先述したように、「下田まち遺産」を自分たちが表現したい手法によって映像作品とすること以外の条件を課していない。また、教員は、その点を何度も問い直すフィードバックに努めた。結果として、各チームともにそれぞれの持ち味が反映された個性的な作品となった。

5チームの作品ジャンルとタイトルは、以下の通りとなる。Aチームは、白浜地区の男性たちによる幟立てを追ったショートドキュメンタリー(図-7)。Bチームは、夫婦神として知られる事代主命と伊古奈比咩命の伝承をモチーフにしたショートドラマ(図-8)。Cチームは、白浜で出会った人々のインタビュー映像(図-9)。Dチームは、都会で暮らす白浜出身の若者の主人公とするショートドラマ(図-10)である。そして、Eチームは、白浜の環境音をもとに再現した楽曲にあわせたダンスのパフォーマンス映像(図-11)となっている。

なお、これら作品は、URLを埋め込んでいる動画リンクないしQRコードより視聴可能となっている。



図-7 Aチームの作品「旗を興す」



[動画リンク](#)

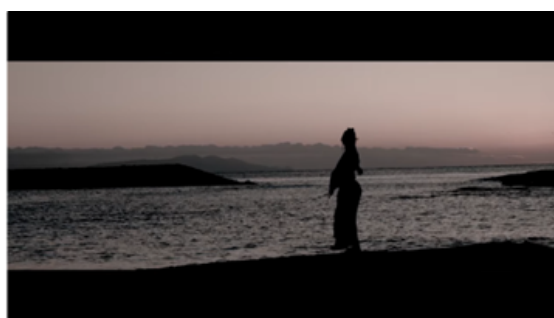


図-8 Bチームの作品「紡ぐ」



[動画リンク](#)



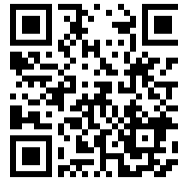
図-9 Cチームの作品「白浜での出会い」



[動画リンク](#)



図-10 Dチームの作品「居場所」



[動画リンク](#)



図-11 Eチームの作品「白浜の環境音×ダンス」



[動画リンク](#)

(2) 作品についての所感

今回制作された作品は、「下田まち遺産」を背景とする白浜の祭礼や自然、人々の営みを、それぞれ異なる視点と表現手法で捉え直したものとなった。

Aチームの「旗を興す」は、幟を立てる男衆の姿に焦点を当て、世代を超えて受け継がれてきた誇りや結束、身体に刻まれた記憶を大学生のまなざしで描いたショートドキュメンタリーとなった。Bチームの「紡ぐ」は、伊古奈比咩命の伝承をモチーフに、時代を越えて人々が紡いできた想いや祈りをドラマとして再構成し、神話と現在を接続する表現に挑んだ。Cチームの「白浜での出会い」は、美しい自然風景から祭りを支える人々へのインタビューへと視点を移し、地域共同体の深い絆や息づかいを切り取ることができた。Dチームの「居場所」は、手紙に導かれて白浜を訪れる男子大学生の心象を軸に、祭りを通して見いだされる「居場所」の意味を静かに描いたショートドラマとなった。Eチームは、祭礼儀式や自然の環境音を素材として再構成した楽曲に、景色とダンスを重ね合わせ、身体表現によって白浜を再解釈する独創的な映像を提示した。

これらの作品群は、記録・物語・身体表現という多様なアプローチを通じて、白浜の多層的な魅力を第三者に届けられる可能性を示している。

(3) 作品の発信

昨年度は、下田有線テレビ放送株式会社（SHK）の自主番組「下田まち遺産の使い方 ～大正大学表現学部下田プロジェクト～」として、学生たちの活動や作品を取りあげてもらった。だが、作品そのものを地域内外に発信するという点では、更なる改善の余地が残っていた。今回は、昨年度同様に、下田市役所の協力を得て、メディアへの事前情報を発信してもらうことで、『伊豆新聞』による取材を受けて記事として伊豆地域全体に発信することができた（図-12）。そのみならず、今年度は、市の公式 SNS アカウントにおいても活動状況をオンタイムで広報してもらうことができた。

さらに、今回のプログラムのパートナーである静岡銀行下田支店の支援を得て、(一社) 下田市観光協会に「白浜映像プロジェクト 大正大学×下田まち遺産」という名称の特設ページを作成してもら

い、2026年1月まで期間限定公開を行った。それに際して、下田市観光協会の SNS アカウントなどを通して、地域内外に向けて情報発信をしてもらった（図-13）。また、現時点では実現に至ってはいないが、今回のプログラムに関して、静岡銀行のサポートによって伊豆急の駅構内のデジタルサイネージで作品を流してもらうことも構想として浮上した。

このように今回のプログラムは、学生たちが学ぶのために自由につくった作品が、結果として観光広報コンテンツとして実際に活用できた、という点において、昨年度に比較して大きく前進した。



図-12 『伊豆新聞』2025年10月30日朝刊



図-13 下田市観光協会の Facebook での共有

4. 今後のプロジェクト構想

今回のプログラムは、下田市が推進する「下田まち遺産」に登録された自然・歴史・風俗などの地域資源を対象に、大学生と地域住民が協働して映像作品として記録・制作・発信する取り組みとして、2年目を迎えた。

以上まとめてきたように、「まち遺産」をコンテンツとする自由な映像づくりを通して、大学生がまちの魅力を再発見するだけでなく、地域遺産に新たな価値を付加した「もうひとつのまち物語り」を創造し、「まち遺産」の継承と発信力の強化を図るという点において、ポテンシャルがあることが確認できた。

今年度は、昨年の課題点を受けて、事前準備期間のレクチャーのあり方の抜本的な変更、フィードバックの強化、実習期間の延長などプログラム設計を改善した。その結果として、学生の作品群は、記録・物語・身体表現という多様なアプローチを通じて、実習先の多層的な魅力を学生ならではの目線で見事に浮かび上がらせることにつながったといえる。それは、ある意味では全国各地の似たような観光広報との差別化を図り、新たなブランディングにもつなげられる可能性がある。こうした点において、今年度にパートナーとして調整支援にあたっていただいた静岡銀行下田支店の存在は、地域の企業や経営者とのつながりの橋渡しだけでなく、社会実装の強力なサポーターとして大きな意味があった。

その一方で、課題が残っていないわけではない。そもそも「下田まち遺産」は、登録制度として一定の記録蓄積がある一方、文章や静止画中心で、地域内外への発信、特に若い世代への認知に課題が

あった。今回のプログラムにおいても、短編映像作品づくりの過程で大学生や地域住民との交流を行ったものの、学生たちの作品づくり及びそのインパクトが地域内にどこまで広がりをもったのか、という点でみるとやはり限定的と言わざるを得ない。

そこで、今後の展開としては、これまでの取り組みの枠組みを活かしつつ、さらに映像制作関連のアーティストなど参加者の多様化を図るとともに、作品展示会場を兼ねて「まち遺産」を活用するアイデアの具現化が考えられる。ここで高校生など若者世代を主たるターゲットとするワークショップを開催し、地域住民が主体的に地域資源を活用する「まなざし」を育むことを自治体への新規事業として提案したい。

そのためにも、授業の一環という制約上、3QT 期間で終了していた本プログラムの期間をさらに延長することを検討している。具体的には、学生たちが作品を仕上げた後、12～3月にかけての公開・発信にあわせて、それら活動の成果を地域に還元する時期として設定する。その期間に、「下田まち遺産」のひとつである旧澤村邸石蔵ギャラリーを拠点に作品展示やワークショップを行うことを考えている（図-14）。



図-14 旧澤村邸（下田市ホームページより）

ワークショップでは、制作にあたった大学生のみならずアーティストも招いて、地域住民から参加を募り、ともに簡単な映像作品づくりを行う。そして、これら完成作品を学生が作成してきた作品とともに、観光・教育・広報などの領域で活用をしていく。このように循環するスキームが作られることで、「まち遺産」を生活や感情、語りと結びつく物語として提示することができ、地域文化の魅力を再評価・再発見する機会を創出できる。特に、ワークショップなどを通じて外部のアーティストや大学生とともに地域を見つめるプロセスを共有できることは、地域資源を次世代へつなぐ有効な仕組みとなる。それによって、地域の魅力の発信力強化やまちづくりに関する住民の主体性の醸成を期待できる。

現段階においては、筆者による願望に基づく構想に過ぎないが、引き続き実践を続けることで具体的なかたちに落とし込み、成果として報告できるようにしていきたい。

5. 謝辞

今回のプログラムに際して、下田市長の松木正一郎様ならびに静岡県賀茂地域局次長の飯田雅之様、白浜神社氏子会長の藤井英次様、下田市役所建設課都市住宅係をはじめとする皆様、下田市観光協会の皆様、そして静岡銀行下田支店支店長の大箸武史様、山下永吉様をはじめ関係各位に大変ご協力をいただきましたことをあらためてお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 長谷川隼人、田島悠史：関係人口が生みだす伊豆下田の景観施策 ―大学・地域連携型授業の実践に向けて―、地域構想、Vol.6、2024.
- 2) 長谷川隼人：地域遺産のデジタル活用化の教育プログラムについて―授業設計の効果検証と今後の展望―、地域構想、Vol.7、2025.
- 3) 杉山浩平、池谷信之：縄文／弥生文化移行期における神津島産黒曜石のもうひとつの流通―神津島砂糖崎産黒曜石の動き、考古学と自然科学、60号、2010.
- 4) 相川壤：後期旧石器時代前半期における神津島産黒曜石の利用とその広がり―原産地推定結果の広域的再集成から、東京大学考古学研究室研究紀要、第33号、2020.
- 5) 深澤太郎：考古学から見た三嶋神・三嶋大明神と『三宅記』、國學院大學研究開発推進機構紀要、第17号、2025.
- 6) 石渡明：平安時代の「日本三代実録」の地震・津波・噴火記録：地震西進系列の白眉、日本地質学会ウェブサイト (<https://geosociety.jp/faq/content1052.html>)、最終参照日2026年3月1日.
- 7) 静岡県賀茂郡白浜村役場編：昭和29年度版天草の要覧、静岡県賀茂郡白浜村役場（「昔の白浜に学ぶ会」により2003年12月1日復刻）、1954.
- 8) 伊豆の天草漁業編纂会編：伊豆の天草漁業、成山堂書店、1998.
- 9) 長谷川雅俊：分場拾遺IV「白浜村宮天草漁業」の実態、伊豆分場だより、第356号、2019.
- 10) 齋藤典子：海女集落の形成過程にみるジェンダー秩序の形成―伊豆白浜における海女労働の事例から、名古屋大学人文科学研究、第33号、2004.